Voice

ヴォイス
特別号
〈第6号〉

大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞
特別号〈第6号〉／発行2011年2月1日

芸短生の過去から未来へ

大分県立芸術文化短期大学は今年、創立50周年を迎える。
先輩へのインタビューで学科の過去をたどり、現在の学生の姿をおさめ、未来へつなぐ声を「Voice」にまとめた。

Cover Story

이민기（イ・ミンギ） 思索する韓流スター

『現在』～日韓短編映画祭
『過去』～先輩たちの残した道標
『未来』～現役学生の声

サービスラーニング

第1回 長湯温泉♨ 日韓短編映画祭

竹田市長湯温泉で11月12日～14日の間、
初めての「日韓短編映画祭」が開かれた。
人気俳優イ・ミンギさんに会いたいと、全国から約300人のファンが「日本一の炭酸泉」に詰めかけた。
26歳の韓国人女性監督ハン・ジエさんは、2週間滞在して3分間の短編映画２本を作った。
映画祭を支えたのは地元の皆さんと、県立芸術文化短大ら4大学の学生スタッフ53人の力だった。

日韓短編映画祭の日程

11月12日（金） 前夜祭

18:00～21:00　上映会＋懇親会「御前湯」大広間
韓国映画「おいしいマン」（イ・ミンギ、池脇千鶴主演）上映

11月13日（土） 韓国の短編映画を上映

9:30～10:30　ソウル芸術大学の学生作品＆解説
「日差しがさす日」「ハンドサイン」「メタルムービー」「家族保険」
10:40～11:50　DKキム・テギュン監督作品＆解説
「森浦への道」「制服着るんやDay」「正午の視線」「プサン・エバーランド」
12:00～12:50　ハン・ジエ監督作品＆解説
2008年全州国際映画祭の短編部門で最優秀賞作品賞を受賞「汽車を止めて」
13:00～14:00　イム・チャンジェ監督作品＆解説
「涙」「ミミ」「序曲、春の祭殿」「水の記憶」「モーニング・カム」
15:00～16:30　シンポジウム「アジアの奥座敷TAKETAで映画を撮る」
16:40～17:30　記念植樹祭（ルカスホール前庭）／「神楽」披露
18:00～19:30　歓迎パーティー（立食）ルカスホール

11月14日（日） 日本の短編映画を上映

9:30～10:10　九州龍谷短大の学生作品＆解説
「先生の舞台裏」（久保康平監督）「軍神～終わらない戦後～」（久保康平監督）
「民話を伝える～日本一の語り部」（古賀美沙紀監督）
10:20～11:10　報告「第２回日韓海峡圏映画祭」（下川正晴）
11:30～13:10　報告「福岡インディペンデント映画祭」
福岡インディペンデント映画祭代表の西谷郁さんが、映画祭の現況と日韓交流を報告
「UNKNOWN」（三ツ橋勇二監督）「さ＞らランドセル」（新井哲監督）
「青春ハイチュウ」「ダイエットのうた」「出張紙芝居」（橘剛史監督）
13:20～13:50　近藤一彦監督トーク＆映画
ショートショート・フィルムフェスティバル」の「旅ショート！プロジェクト」部門で、優秀賞（国土交通大臣賞）を受賞作品「瞬くほど曖昧な夕暮れに」
14:00～14:10　閉幕式

11月14日（日） 竹田キャンパス 交流映画会

10:00～13:00　「ブラザーフッド」（吹き替え版）
映画祭特別顧問キム・ジョンウォン氏の特別解説

Cover Story ////////////////////////////// 取材・執筆：赤池すずか、中村早希、森本絵美莉

이민기（イ・ミンギ）
思索する韓流スター

（イ・ミンギのサイン）

俳優イ・ミンギは不思議な人だった。複層的な魅力のある韓流スターだった。
身長183cm、体重68kg。25歳。女性に人気の「弟」タイプ。
そんな表面的な評価とは異なり、私たちが見た彼の実像は「思索する青年」の姿だった。（文中敬称略）

“私たちが見たイ・ミンギ”

昨年11月、竹田市長湯温泉で第1回「日韓短編映画祭」が開かれた。そのメーンゲストがイ・ミンギだった。会場の収容能力の10倍近い1500人のファンが、チケットを求めて殺到した。その魅力は何なのか？私たち学生スタッフにとって、彼は「検証」に値する十分な取材対象だった。

＜証言(1)＞

芸短2年・赤池すずか「シンポジウムで同席したんです。彼が『吉田修一の小説を読んだ』と言うので驚きました。私はまだ読んだこともない。彼は『関係性ということを考えるようになった』という。エッ!?と思いましたネ」

確かに意表を突く発言だった。普段はおどおどとした表情。“天然”と称されることも少なくない。だが、発する言葉は意外に思索的なのである。

イ・ミンギに接した映画祭関係者の証言をさらに紹介する前に、彼に対する「一般的なイメージ」を点検しておこう。

＜イメージ(1)＞

「モデル出身でルックス抜群の次世代オルチャン（二枚目）俳優」（Goo韓流スター名鑑）

＜イメージ(2)＞

「ヌナ（年上の）ファンをはじめ、女性ファンの人気を一身に受け、期待の新人として急浮上」（Innolife）

＜イメージ(3)＞

「当初モデルとして活動をはじめ、“第2のカン・ドンウォン”とも呼ばれていた」（WOW KOREA）

このような印象をもとに、彼に対面した映画祭関係者は、すぐに「イメージと異なる」韓流スターを発見することになる。

＜証言(2)＞

映画祭ディレクター・下川正晴「実はシンポジウムの前夜に、質問内容について相談したんです。彼の答えに驚きました。『簡単に答えようとすれば出来ないことはない。でも本当に考えれば、難しい質問ばかりです』。あれっ、この人（イメージと）違うじゃないかと気がつきました」

次は、彼の発言を通訳した2人の韓国人の証言だ。

＜証言(3)＞

女性通訳パク・スネ「シャイな人ですよね。謙虚というか、自分のことを積極的には話さない。話をする時には、十分に考えてから発言をする。間近で見ると、カッコイイというより、カワイイという印象。何事も快く引き受けてくれる。そんな優しさがある。人気の理由がわかった気がします」

イ・ミンギのファン層は、彼女とほぼ同年代の女性が多い。「カワイイ」。その直感は当たっているかも知れない。しかし、韓国人でも男性の声はやや異なる。

＜証言(4)＞

映画祭コーディネーター、イン・ソンウン「まる2日間、一緒に寝泊りしました。好青年です。自分を持っている。自分の価値観とポリシーを大事にする。ファンをとても大切にする」

これまでの映画祭でも、彼は監督イム・グォンテクや俳優アン・ソンギら先輩映画人をガイドしてきた。その彼の目から見ても「ミンギは映画人としての意識をしっかり持っている」という。

私たちがなぜ、韓流スターとしてもてはやされるイ・ミンギの「実像」を知りたくなったのか？端的に言えば、それは「マスコミ不信」があるからだ。大学生記者として取材活動を重ねるにつれ、その思いは募った。人物の「実像」を伝えることの困難さも知った。だから「卒業研究」の一環として、「韓流スター論」を試してみるのも悪くないと思った。

実際、実物のイ・ミンギは「モデル出身の二枚目俳優」のイメージとは大違いだった。

「監督として映画を作ることになったら、どんな映画を作りたいか」。シンポジウムで彼はこんな質問を受けて、しばし考え込んだ。事前の打ち合わせにはなかった質問だ。答えは以下のようなものだった。

「監督という仕事は、まだ考えたことはありませんが、もし映画を作るとしたら『自分と何かの関係』についての映画を作りたいと思います」。彼が小説家・吉田修一の名前を挙げたのは、この時だった。

「映画と歌、モデルの違いは？」という観客からの質問も、想定外だった。

彼は答えた。「音楽は映画の中で飾りにもなりえるし、映画を支配する存在にもなりえる。音楽がストーリーになることもある。そういう面からみて、音楽と映像は同じライン上にある関係です」。これは彼の分析的な思考が最もよく表現された回答だった。

「監督の目から見た俳優イ・ミンギは、どんな俳優ですか？」。シンポジウムの司会者が聞いた。韓国の天才監督イ・ミョンセの答えは明快だった。

「人間的に深くて、頭がいい」。ただ、それだけだった。そして「だからキミを映画に使いたんだよ」というように、隣のイ・ミンギを見やった。私たちの「イ・ミンギ論」の結論は、この”映像派の巨匠”の発言に触発された。

最後に、学生スタッフの証言を紹介したい。「ナマの韓流スターと接することができる」。これは映画祭に携わった全ての学生が感じた、醍醐味のひとつだったからだ。

＜証言(5)＞

芸短2年・吉弘梓「ファンの1人1人に、丁寧にお礼をするんです。『俳優』の型にはまらず、ありのままの姿を見せる。自然な人だなと思いました」。彼女は控え室担当として、至近距離でイ・ミンギを見た。

＜証言(6)＞

芸短1年・中川響「最初はクールな人だと思ってた。ところがお茶を出した時、笑顔でお礼を言ってくれる優しさに驚いた。全てのイベントが終わり帰る時、一度立ち止まって、深々とお辞儀した。すごいと思った」

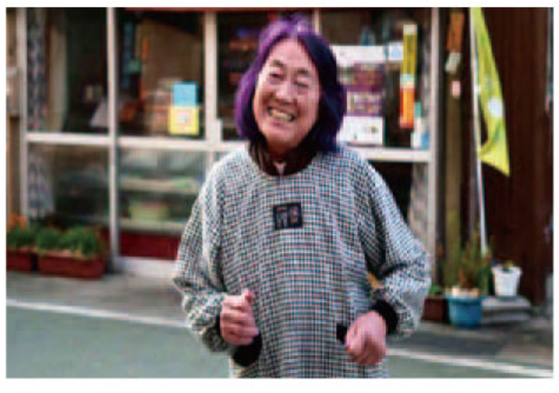
韓流スターの虚像と実像。それぞれの映画祭関係者に異なる印象を残しながらも、イ・ミンギは「マスコミ発のイメージ」とは違う姿を垣間見せた。私たちは、そこに”一流”と呼ばれる人たちの「真実」を見たような気がする。「おごらない真摯な人物」。学生スタッフたちが感じたイ・ミンギ像は、映画祭の目に見えない収穫だったに違いない。

竹田の「可愛い隅」を映画に
ハン・ジエ監督 in 長湯

竹田は隅々が細かいものでいっぱいで、美術をする人々なら皆が好きになるくらい可愛い隅がある町でした。昔のものがたくさん残っている静かな町の隅々を歩いてみると、ある瞬間、時間が止まっている気がしたりしました。私はたまに通り過ぎる人々を見て、頭の中で彼らに２００年前の伝統衣装を着せてみては、話を作ったりしました。すべてのものがとてもゆっくり動くようでした。

私は世界の隅々に住んでいるそれぞれの人々が生きている文化と社会に関心があります。私は長編映画だけが映画だとは思いません。いつかは長編映画を作るようになるとは思うけれど、その時が来るまでは多くの人に出会って、彼らの生き方を観察して、話して、人生を学びたいと思います。

そして私は今、“昔々、遠い昔の長湯で”のような作業を、全世界の小さな村の連作シリーズとして作るつもりです。そういう作業の中に彼らの文化と生き方、楽しみなどをそのまま詰め込むつもりです。もちろん、お金を稼ぐことができない作業なので簡単ではありませんが、このような絶え間ない努力を通して成長したいと思います。（広報たけた「ハン・ジエ監督手記」より）



大学院生監督の長湯温泉撮影記

２度目の日本、初めての九州。「多くの人々と出会いたい」。それがハン･ジエ監督（２６）の念願だった。映画祭で短編映画の製作を依頼され、１０月２９日から閉幕まで現地に2週間滞在した。彼女の念願は叶えられたのか？

滞在１週間目。ハンさんは不安だった。「観光宣伝の映画を撮りに来たんじゃない。この街で何かを感じて、それを映像にしたい」。周囲の期待とのズレを感じながら、「竹田は美しい街だ」と感じていた。

古い街並み。風。木と山が続く。そして温泉・・。短編１本目の「ＬＯＳＴ　ＩＮ　ＴＡＫＥＴＡ」には、自身が出演した。レンタカーが故障し立ち往生した韓国人女性の物語。竹田城下町の街並みを、トランクを引きずりながら歩く姿に、若い旅人の心象風景が重なる。

２本目「長湯温泉の人々」は愉快な傑作だ。ある日、温泉街を流れる川の中にある露天湯「ガニ湯」に浸かっている男女２人を見つけた。もちろん素裸だ。さっそくカメラに収めた。Ｖサインまでしてくれた。

そこに登場する「勇気ある男」。撮影用車両を提供してくれた赤川温泉の池田高明社長だ。サムライ姿で楽しく踊る。続々と踊る地元の人々、そして猫、木と山・・。地元小学生の笑顔がとてもキュートだ。

１３日の映画祭シンポジウムで作品は公開された。「（男女の混浴シーンは）演出じゃありません。偶然に見つけたんです」とハンさん。浴衣姿で出演した映画祭事務局次長の佐藤美樹さんは「かなりのテイク数をこなしました。（演技指導は）厳しかった」と語る。

ハン監督はソウル漢陽大映画学科の学生だった2008年、短編映画「汽車を止めて」で全州国際映画祭短編部門最優秀賞を受賞した。現在は韓国綜合芸術学校大学院生（休学中）。将来を期待される映像作家だ。

長湯温泉で作った作品は、地元だけなく映画祭の観客にも好評だった。映画が YouTubeにアップされると、東京から「温泉のような温かさを感じる映画。ときどき見返して、また、ぬくぬくとしたい」というコメントが届いた。

２週間の滞在中には農家民泊も体験した。こたつや畳などがある日本の伝統的な家屋で生活するのは初めてだった。「竹田は寒かったが、人々の温かさに触れた。すごくいい経験になった」とハンさん。同行した撮影監督のイ・ソヒョンさんは「ここで一生暮らしたい」と語った。（文･赤池すずか、森本絵美莉）

こうして竹田キャンパスは誕生した

県立芸術文化短大と竹田市は平成２０年１１月、相互協力協定を結んだ。平成２２年４月からは旧下竹田小学校の校舎を「芸文短大竹田キャンパス」として開設した。いま、新たな芸術文化活動の拠点として活用されている同キャンパス。その「誕生秘話」を追った。

協定締結から半年後の平成２１年４月、短大にキーパーソンが県庁から赴任する。山蔭政伸事務局長だ。美術科の教員・学生たちから「時間と空間を自由に使える、そんな創作活動の場が欲しい」という要望を聞いた。タイミングよく竹田市には首藤勝次市長が就任した。２人は県立大分舞鶴高校の同級生だった。「廃校後に賑わいを取り戻す方法はないか」。竹田市側のプランに、芸文短大側の「サテライトキャンパス構想」は最適のものと映った。中山学長も同じ思いで、両者の思惑が一致した。

地元の元直入町観光協会長・佐藤正さんも、２３８４人の卒業生を生み出した小学校跡地の有効活用策を模索していた。短大側からの提案に諸手を挙げて賛成した。

平成21年９月、芸文短大が中心になり、高校生も交えた「アートキャンプ」が４日間行われた。校舎に宿泊し制作活動を行ったのである。最後の夜は地域の人々とバーベキュー。楽しい交流会になった。「テスト」は成功裏に終わった。

体育館横に桜が咲く平成２２年４月８日、竹田キャンパスは開校の日を迎えた。芸文短大ＯＢで美術科非常勤講師（工芸演習）の前田亮二先生が住み込みを志願した。染色作業を十二分に出来る空間は、前田先生にとっても魅力的だったのだ。「赤い半纏」がトレードマーク。門司港アート村でも、小学校跡のアトリエで制作をした経験もあった。「住み込んでみて、地域の人達にこれほど、よくしてもらえるとは思わなかった」と笑顔で語る。

前田先生らが講師となって「地域ふれあいアート講座」が行われている。人文系を含む各学科のゼミ研修会もある。近くの長湯温泉で開かれた日韓短編映画祭（昨年11月）の際には、５３人の学生スタッフが２日間、校舎に泊り込んだ。「同居人はたくさんいるに越したことはない。卒業生がどんどん入って来られるような場所になればいいなあ」と前田先生。

キャンパスの１階には「メモリアルホール」がある。旧下竹田小学校の思い出の品々が展示されている。特に、今では珍しい「二宮金次郎の像」が学生たちの人気の的だ。

「若者が入ってくることで、新しい発想が生まれる。大学のない竹田市が学生たちであふれる」。首藤市長が進める構想にとって、竹田キャンパスは重要な拠点だ。キャンパスの賑わいが地域の賑わいへ繋がって行くために、私たちも若い発想とエネルギーを惜しみなく発信して行きたい。（文・中村早希、森本絵美莉）

会場からU-STREAM生中継

第１回日韓短編映画祭で挑戦した「U-STREAM」ライブ中継。13日の映画祭シンポジウムの時には、なんと７００人近くが視聴していた。

ブログのコメントでも「U-STREAM、良かったよ」などの声が届いた。当日は、今まで使ってきたＬＡＮケーブルが繋がらないなど、ハプニングも多々あった。ケーブルが老朽化していたからだ。それでも、ネット管理の学生スタッフや上映機器を提供した三友株式会社、それに竹田市役所直入支所の方々の手を借りて、無事に放送することができた。

私たち学生たちだけでは到底、成しえなかったことだ。皆さんには感謝しきれない。映画祭を通して、新しい情報発信の方法を知ることもできた。発信手段が増えることで、幅広い選択ができる。私たちの見聞がかなり広がった映画祭だった。（文・中村早希）

U-STREAM：
http://www.ustream.tv/channel/geitan-live

九州龍谷短大の作品を見た

日韓短編映画祭の３日目（14日）、九州龍谷短期大学（鳥栖市）の学生作品が３本上映された。どの作品もドキュメンタリー風な表現で、観客に分かりやすい点が特徴的だった。

古賀美沙紀監督「民話を伝える～日本一の語り部～」は、紙芝居を通じて子供たちに民話のよさを伝えるなど、地方の昔話の魅力を引き出した作品。43の民話を記憶している95歳の蒲原タツエさんを中心に、伝統を守っていこうとする取り組みはすばらしいと思った。

久保康平監督「先生の舞台裏」は、フリーアナウンサーの副田ひろみさんの前向きな生き方を追った作品である。23歳の息子を事故で亡くした辛い経験を持つ副田さんは、家族が１番大切だと話す。身近にある家族がどのような存在なのか、とても考えさせられた。

同じく久保監督の「軍神～終わらない戦後～」は、真珠湾攻撃で戦死した九軍神の１人である広尾彰さんの人生と家族の気持ちを、とらえた作品であった。21歳で国のために戦死し、「軍神」と称えられる。しかし、310万人の戦死者の１人としてとらえることもできると、彰さんの父が苦悩する場面もあった。

「もし戦争がなかったら、違う生き方があったかもしれない」。私たちの平和に対する意識が問われているようにも感じた。（文・太田有里紗）

湯温泉
韓短編映画祭
Japan & Korea

대기실

JKF

大浴場
「万象の湯」
BANSYO NO YU

わたしの映画祭
～学生スタッフの声～

◆チームワークの大切さを感じた

「学生管理」を担当した。最初は何をやればいいかわからず、みんなと混ざって行動をしていた。先輩方のテキパキとした対応や熱心な姿に、じっとしてはいられなくなり、自分の役を把握し、先輩にひっつき行動した。その中で目上の人との接し方、みんなへの気配り、優先順位の仕方などを学んだと思う。チームワークの良さも感じることができた！今回は指示を受けるばかりで、あまり考えず行動していたが、次の行事は自ら行動できるようになりたい、と強く思った。先輩方には感謝をしている。（１年・金子桃佳）

◆挨拶でつながる

貴重な経験ができた３日間だった。私は初めて短編映画に触れた。ゲストのハン・ジエ監督と、映画上映前に打ち合わせをした。APUの韓国人留学生に通訳をしてもらいながらの打ち合わせだ。私は、ハン・ジエさんに「アンニョンハシムニカ」と言おうとした。その前に、ハン・ジエさんが「こんにちは」と言ってくださった。私は挨拶一つでも、緊張したのに、ハン・ジエさんは初対面の私に対しても、日本語で躊躇なく挨拶。そのことがとても嬉しかったし、すごいなと思った。（１年・櫻井奈菜子）

◆後輩の雄姿を

私は動画班として活動した。ゲストの撮影はもちろん、スタッフの準備する風景やお客さんの来場する姿をカメラにおさめた。撮影リーダーと共に、インタビューをして走り回った。この３日間は、実に充実した日々だった。１年生の２人も初めはなかなか上手く撮れずにいたが、２日目、３日目になるにつれて、撮る時間も撮り方も上達していった。来年の別府での映画祭では、１年生の雄姿を見て、今回の映画祭を思い出したいものだ。（２年・鎌田麻衣）

◆やりがいのあった3日間

どんなに計画を立てても、確認をしていても、ハプニングの連続。とにかくバタバタだった。「学生管理」担当として他の学生スタッフへの指示、地元のスタッフのみなさんとの連携、お客様への気配り…。全てを把握し、動くことは簡単ではなかったが、とてもやりがいがあった。スタッフ、ゲスト、お客様、たくさんの方がいたから、映画祭は成り立つものだと実感した。（２年・佐藤明日美）

◆人柄の良さに助けられた

普段経験することができないような貴重な経験をする事ができたと思う。韓国の俳優さんや監督の方々と交流する事ができたり、近藤一彦監督の担当をさせて頂くことになったり、初めての経験で戸惑うこともあった。先輩方が親切に指導してくださったし、みんなが頑張っている姿を見て、３日間頑張る事が出来た。近藤監督の人柄の良さにも助けられた。今回の経験を、これからの学校生活でも活かしていきたい。（１年・川上真央）

◆映画に興味を持った

私は「静止画」担当だったため、ずっと会場の中を見る事ができた。やはり一番盛り上がっていたのは、イ・ミンギさんが登場したときだ。生でイ・ミンギさんを見ることが出来て嬉しかった。映画祭では、映画がどのように作られているのかを詳しく聞くにつれ、映画にすごく興味を持った。別府の映画祭でも、いろんな人の話が聞けそうなので楽しみにしておこう。いい経験になった。（１年・久保加奈子）

～ 学生スタッフひとこと集 ～

- 上映係。短編なので会場から離れられなかった（小坂由真）
- 司会をやり終えた。自分にもできるんだ(長田莉歩）
- ネット管理。機器が変になったり、細かいトラブルが多発（山下裟世）
- 会場係。地元のスタッフの作業ぶりが参考になった（山元泰幸）
- 屋外でのグッズ販売。寒さに参った（中村優伽）
- とりあえずやり切ってみる！
  くじけそうになってる自分がいたら、そう言いたい（井上千嘉）
- 「来年も楽しみにしています」その言葉で疲れが吹き飛んだ（赤池すずか）
- 『ブラザーフッド』を見た。私たちは歴史を知るべき世代なのだと感じた（中川響）
- 日本と韓国、それぞれ独特の考え方を持っていることを発見した（太田有里紗）
- 私の映画祭は終わらない。今からが動画編集の本番（森本愛里）
- U-STREAMのカメラ担当。近くでゲストの会話を聞けた（内田共香）
- おばさま達の熱狂ぶりに驚いた。真剣に警護をした（井上舞華）
- ２年生。後輩を指導する立場の責任を感じた（吉弘梓）
- 先輩たちを見て、リーダーシップの大変さを感じた（丸野由貴）
- 自分の仕事を責任持ってやり通す。その大切さを実感した（青山ひかる）
- 最後までやり通した。友達の支えがあったから（高橋咲）
- 私も上映班。地味な仕事だけど大変だった（村井安里）

『過去』

～先輩たちの残した道標

②学生生活 芸短祭

②学生生活 昼食の様子

①サークル テニス同好会

①学生生活

①体育祭

③別府時代の学友会風景

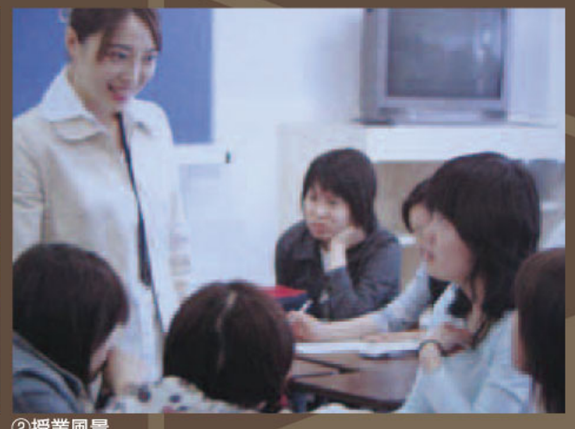
③入学式に向かう様子

①授業風景

②学生生活 芸短祭

②学生生活 芸短祭

②サークル


②授業風景

②授業風景

②図書館利用風景

②進路支援室

④大学キャンパス航空写真

〈参考文献〉 ①大分県立芸術文化短期大学パンフレット1996年 ②大分県立芸術文化短期大学パンフレット2005年 ③大分県立芸術文化短期大学創立30周年記念誌 思いは熱く 1991年
④大分県立芸術文化短期大学 二十年史

沿　革

昭和	
34. 4. 1	大分県立別府緑丘高等学校専攻科発足
36. 4. 1	別府市に大分県立芸術短期大学発足
40. 3.20	大分県立別府緑丘高等学校が本学の附属高校となる
50. 4. 1	大分市上野丘東１番１１号に全学移転
54. 4. 1	専攻科（美術専攻科音楽専攻科）新設
平成	
元. 2. 1	大分県立芸術短期大学将来構想懇話会発足
元.12.26	「大分県立芸術短期大学の将来構想に関する報告書」を知事に提出
2. 4. 1	芸短大学科設置準備室発足
4. 4. 1	「国際文化学科」「コミュニケーション学科」を増設し、名称を「大分県立芸術文化短期大学」に改称
4. 6.19	国際文化学科・コミュニケーション学科開設記念式
7. 5. 1	芸術系大学設置準備室発足
8. 6.17	「大分県立芸術系大学構想にかかる報告書」を知事に提出
13.10. 8	本学創立４０周年記念式
15. 4. 1	コミュニケーション学科の名称を「情報コミュニケーション学科」に改称
18. 4. 1	公立大学法人となる
19. 4. 1	２年制の認定専攻科（造形専攻・音楽専攻）を開設
21. 9.28	文部科学省「大学教育推進プログラム」に情報コミュニケーション学科を中心に全学科を対象とした「体験をスキルに変えるナラティブ能力養成－サービスラーニングを中心とした自己の物語を探し創り発信する能力の形成プログラム」が採択される
23. 4. 1	本学創立５０周年を迎える

先輩たちの『現在』の姿

人生の転換期はたくさんある

＜主婦 高取加奈さん（福岡県）＝平成19年度卒 佐藤淳介ゼミ出身＞

明るくて、優しい笑顔が印象的だ。現在は福岡県内に在住し、子育てに奮闘中の主婦である。芸短卒業後、大分銀行に就職し、１年後に子どもを授かり退職、結婚した。「結婚して良かったですね」と語る。

学生時代は心理学に関心を持ち、特に体験型の授業に熱心に取り込んだ。「子育てをしていく中で、授業で教わったことが役立っています」。結婚生活、子育ては楽しく、充実した日々を送っている。母親として大変なこともあるが、「家族のためなら、がんばれます」と笑顔を絶やさない。

「就職活動をしていた時は『今がすべて』と思っていたが、結婚を機に『人生の転換期はたくさんある』と感じた」という。「人生の修正は何度でもきく。その時その時を一生懸命生きることが大切です。後悔はありません」。後輩の学生たちに向けて、体験に基づく貴重なメッセージを送ってくれた。

「今は子どもが元気に大きくなってほしい。ただそれだけです」。慈愛の眼差しをお子さんに向けながら、とてもはつらつとしていた。（文と写真・森本絵美莉）

恵まれた環境で将来を見つける

＜セラピスト 安土かほりさん（別府市）＝平成13年度卒 藤田文ゼミ出身＞

芸短大を卒業後、別府大に進学、さらに同大学院で勉強して臨床心理士の資格を取った。院を修了後、別府市の児童養護施設「光の園」でセラピストとして、子どもたちと向き合う毎日だ。今年で５年目になる。

ほんわかとした柔らかい印象の女性である。「癒し系」という言葉が似合う。卒業研究は「児童虐待」だったという。「バイトにも精を出して、レストランのホールを２年間勤めました」

セラピストになった理由は？「人に関わる仕事がしたかったんです。特に子どもの心理ケアにかかわる仕事をしたいと‥」。子供たちは一人一人がそれぞれの課題を抱えている。その子たちとしっかり向き合い、成長を支援する。「ささいなことでも前向きな変化が見られた時がいちばんうれしいですね」と、微笑みながら語る。

在学生にメッセージを。「芸短は本当に幅広く学べる場所です。恵まれた環境だということを、卒業してから気がつきました。短大生活の中で、自分の将来を見つけてほしい」（文と写真・中村早希）

２年間は大切な時間だった

＜エステティシャン 宮本瞳さん（宇佐市）＝平成18年度卒 関口洋美ゼミ出身＞

「自宅に帰り着くのは、夜９時を過ぎる。でも、やりたかったことだし、やりがいがある仕事だから」。芸短を卒業後、美容の専門学校に２年通った。現在はエステティシャンだ。

「入学当時から短大を辞めて、専門学校に行こうかと迷っていた」という。しかし、興味のある講義やたくさんの経験、多くの人と出会う中で、大学での時間はとても大切なものに変わっていった。

「芸短は専門学校や一般社会とは違う。別の空気が流れている。自分と向き合える時間がある。２年間の中でしかできないことも多くできた。芸短に行って良かった。芸短で過ごした２年間が、知識や成長につながって、今の私がある」

仕事は、フェイシャルエステや接客を中心に行っている。お客様一人ひとりに対して、カウンセリングをし、次に技術を行い、エステ後は食事や運動などについて一緒に考える。そんなトータルケアを行う毎日だ。

「お客様に喜んでもらえることが何よりですね。これからはもっと仕事を極めて、将来は子どもや高齢者にエステと関連したことをして、役に立ちたい」（文と写真・森本絵美莉）

学生たちのオアシス

＜アパレル店長 難波香さん（大分市）＝平成14年度卒 吉良伸一ゼミ出身＞

短大卒業後、アパレル会社ファイブフォックスに入社し、勤続８年目を迎えた。現在、ＢＡＳＩＬＥ２８の店長を勤めている。初めてお会いした時、おしゃれでとても優しい印象を受けた。短大時代の友人達の中では、あまり怒ったところを見たことがなく、皆のオアシス的存在だったそうだ。

短大時代、湯布院映画祭にボランティアとして積極的に参加していた。その活動は、卒業後も２年間にわたって続いた。本人はボランティアというより、好きで参加していたそうだ。そして卒業後、秘書実務やパソコン操作、書類書きなどの授業が役に立ったそうだ。

「将来、食堂をしたい。誰でも入りやすくて、夜まで定食を食べられるようなお店。一緒に陶器や雑貨なども売れたらいいな。」と彼女はこれからの人生の夢を話していた。（文と写真・佐藤明日美）

取得した資格が役立つ

＜銀行員 栗山怜奈さん（大分市）＝平成19年度卒 藤田文ゼミ出身＞

趣味は友達と遊ぶことだった。よく一緒に旅行に行った。１年の２月から就活を始めた。２年生で秘書検定２級を取得した。

色々な人と接する職業を希望し、豊和銀行を志す。念願通り、豊和銀行に入行。４年後に、本部秘書室に異動した。現在は渉外を担当している。

「入行当初は研修結果を活かせず、何も出来ない自分に涙することもありました。秘書室に異動になった時は、短大時代に取得した資格がこんなに役に立つとは思わなかった」と語る。

「この芸短に入学してなかったら、秘書の資格を取得していなかったし、自分は今の仕事に就いてなかったと思う。芸短に入学して本当によかったです」。（文・山元泰幸）

何事にも挑戦

＜大分ケーブルテレコム 松尾美幸さん（大分市）＝平成21年度卒 下川正晴ゼミ出身＞

芸短大を卒業後、制作として大分ケーブルテレコムに入社。勤続1年目の新米社会人だ。「何事にも挑戦する」。松尾さんが芸短時代に心がけたことである。特に「日韓次世代交流映画祭」の司会を担当したことは、大きな意味があった。「度胸や自信がついた。表現することの楽しさと難しさを学べた」。映画祭は確実に、彼女を成長へと導いていった。

映画祭をきっかけに２年間で３回、韓国へ足を運んだという。彼女はソウル市立大でルームメイトだった韓国人学生と今でも手紙やメールのやりとりをしている。韓国という異国での体験を通して、視野が広がったと語る。

「大分の良さや両親の有難みも改めて感じました。ケーブルテレビ局でも、何事にも挑戦し続ける気持ちで頑張っています」。自分の心境を笑顔で話してくれた。私自身も、いつまでも挑戦し続ける人間でいたい。（文と写真・森本絵美莉）

写真左：松尾美幸、写真右：第2回日韓次世代交流映画祭ゲストのアン・ソンギさん

『現在から未来』

～私たちの姿

毎日新聞大分版 はがき随筆
2010年 5月の月間賞・佳作
『59回』

（2010年5月21日掲載・毎日新聞大分版）

これは私の中で新記録だ。１時間で５９回もカメラに向かってほほ笑むことは、この先ないと思う。着慣れないスーツと初めての履歴書用写真撮影では、なかなかうまくできなかった。無理やりに口角を上げようとするが、不自然な笑顔になってしまう。撮り終えられない写真は、自分の就職活動を暗示しているようにも思えた。

「５９枚も撮ることは縁起がいいと思いますよ。５と９で、ごうかく（合格）です」。カメラマンの方の心遣いがうれしかった。私の就職試験は始まったばかりだが、桜が咲くころには自然な笑顔でいたい。（2年・成松美由紀）

成松美由紀さん「妥協はしない」

「日本語表現Ⅰ」の授業で、エッセイの創作に取り組んだ。毎日新聞大分版に連日掲載されている「はがき随筆」に応募するのだ。わずか２５０字の文に、自分の思いを込めて表現する。

題として「春」のイメージが浮かんだという。しかし、１回目に提出した文章は「女の子に特有な、よくある文章だ」と指摘された。ショックと悔しさが同時に込み上げてきた。提出締め切りは翌週だった。自宅で書き直した。「私は何を伝えたいのかな」。自分自身と向き合った。５回も６回も、納得のいくまで書き直した。妥協はしたくなかった。

その結果できあがった作品が「５９回」である。就活のための写真撮影をめぐるエピソードだ。カメラの前で緊張しすぎたせいで、彼女は５９回も写真を取り直したのだ。

「５９＝合格（ごうかく）回」。軽いウイットで締めくくった作品の評価は高かった。新聞紙面にも掲載された。高校時代の恩師が読んでいて、喜んでくれた。教室で、毎日新聞支局長から「月間優秀賞」を授与された。ちょうど、金融機関の２次試験前を控えていた時期。自分に自信がついた。そして、みごとに合格した。

今春から大分県信用組合に務める。鶴崎の「左衛門踊り」を支援するなど、地元に密着した企業風土が気に入っている。

鶴崎の出身。幼い時から縁のある金融機関である。芸短では「ＳＡＥＭＯＮ23」の１年生責任者、２年生では実行委員長を引き受けた。やろうと決めたことには真剣に取り組む。「働きやすい職場環境を作れる存在でいたい」。希望にあふれた笑顔で話してくれた。（文・森本絵美莉）

韓国を学び、中国を学ぶ～本村裕美さん

（平成20年度卒 下川正晴ゼミ出身、熊本大学４年・上海留学中）

この４年間で人生が変わった。

高校生の時に、韓国に関心をもった。それが全ての始まりだった。「知りたい」という知的好奇心から、黙々と勉強した。勉強というより、むしろ楽しい「趣味」だった。「いずれ、韓国で学ぼう」。その頃から漠然と考えていた。

しかし私は今、上海にいる。芸短から熊本大学へ進学後、交換留学生としてやってきたのである。２１世紀は日韓２カ国だけでなく、東アジア水準でものを考えなければならない。短大時代にそうアドバイスをいただいたのが理由だ。日韓中英４カ国語を話せる。広告やマス・メディアのプロになる。そんな「二刀流」になることが、私の目標なのである。

私の原動力は、映画関係で働きたいという夢だ。芸短時代に携わった「日韓次世代交流映画祭」をきっかけに、イム・グォンテク、イ・ミョンセという２人の著名な映画監督とメールできるようになった。

夢のために自分が信じる道を、他人とは別の道を選んできたおかげだ。特別なことをしてきたわけではない。自分は何がしたいのだろうか。そのために、どうすべきなのだろうか。それを毎日考えては、年上の方の話をよく聞いてきただけだった。

好きなことを誰にも負けないくらい深めること。目標を持ちひたすら努力すること。芸短時代に学んだことは、私の価値観に大きく影響した。現在、自分の道を模索している人もたくさんいると思う。私も模索中だ。学びたいことがある限り探究すべきであり、その結果、道が開けていくのだと信じている。

写真右：本村裕美

墨人間の栄光

※「日本語表現Ⅰ」の課題から転載

座ってはいられない書道に出会った。書道は座って静かに書く、というイメージだ。それを一新させたのが、パフォーマンスである。等身大をはるかに超える紙に、巨大な筆を走らせ、メロディーに乗せて書を披露する。高校時代、その魅力にとりつかれた。

「墨人間」。書道に魅せられた人種のことだ。私もそうだ。

高校文化祭では毎年、パフォーマンスを行う。最高の出来を目指して、夏休みの行動が開始される。三味線の奏でる音とリズムが素晴らしい曲を、自分たちで選曲する。書く言葉や文字も自ら考える。私は『我道』と書くことになった。大学受験を控えた私なりの決意である。

パフォーマンス練習は、過酷だ。毎回、墨だらけになる。足の裏、手、顔、爪の中まで黒に染まる。全力で紙に向かう。墨がはじけ散る。顔に墨が飛んでも、笑いはない。みんな真剣そのものである。動きに遅速の変化をつけ、完成度を上げた。

帰宅すると、廊下には黒い足跡が出現する。裸足で練習するため、足裏に墨が染みつくのだ。風呂場にも足跡。石鹸で洗っても、完全には落ちない。「墨人間」の生活とはそういうものだ。

そして、いよいよ本番がやってきた。ステージの袖で、脈打つ心臓の鼓動を抑えながら、ステージを見つめる。順番を待つ。後輩が真っ黒な顔になって、袖に戻って来た。いよいよ私の番だ。

深呼吸をし、ステージ中央へ行き、一礼。紙に向かう。紙をにらみつける。一呼吸をし、私は飛んだ。「ダーン！」と打ち込み、力一杯に筆を運ぶ。真っ白な紙に、黒が映える。墨をたっぷり含んだ巨大な筆。重量も忘れ、必死に紙に食いついた。

最後の見せ場、「道」のしんにょう。紙の中心から端に、一気に筆と体を運ぶ。ダイナミックな動きに、歓声が沸く。私の魂、『我道』が完成した。

達成感で一杯になった。今でも鮮明に記憶している。「墨人間」。私はそう呼ばれて光栄だ。

（1年・櫻井奈菜子）

私とおかんは同級生

※「日本語表現Ⅰ」の課題から転載

おかんは今春、大学生になった。私が毎晩遅くまで受験勉強に励んでいた時、おかんもこっそり勉強していた。家族はみんな知っていた。知らなかったのは私だけだ。

２月の終わり。大学受験後の帰りの車の中で、おかんが言った。「次はお母さんの番やわ。がんばらんといけんなあ」。私はあまり気に留めず「何で？」と軽くいなした。次の瞬間、おかんの衝撃的な一言。「大学の試験を受けるんよ」。にっこり笑って言った。「誰が？」「お母さん」「…ウソやろ」。試験の疲れと衝撃告白。脱力感で一杯になった。

高３になってから、夜12時すぎまで塾で勉強していた。帰宅するころには、家族はほとんど寝ついていたが、おかんだけは私をいつも待っていた。当時、おかんは頭を抱えながら受験勉強に取り組んでいた。それに私は気づかなかった。

おかんは、これまでもたくさんの仕事をしてきた。何にでも挑戦してみようという意欲がある。どんな仕事も、そつなくこなしていた。「福祉の道」を考え始めていたある日、私が「それ、おかんの天職やん」と言ったらしい。その一言が、おかんに大学受験を最終決断させたという。そして、おかんは必死になって勉強したのである。

この話を聞いた時、おかんが私より輝いて見えた。うらやましい。素直にそう思った（おかんには内緒だけど）。私の合格発表の前日、おかんは大学合格を決めた。「春からは女子学生やわ」と浮かれるおかん。おとんは「誰が女子大生か」と、あきれながら突っ込んだ。

家族の中に大学生が２人もいる。大学こそ違うが、私と同級生である。私の心境は複雑だ。おかん、今年４３歳やろ。（1年・長田莉歩）

Last Chorus

編集後記

左から森本絵美莉、中村早希、赤池すずか

◇走った先に未来を見つけた

「この学校ではアナウンサーになれないのですか」。入学して最初の「情報発信特講」の授業後、下川教授の研究室に走って行ったのを思い出す。必死に話を聞いた。「アナウンス技術だけでは通用しない。マルチな能力が必要だ」とアドバイスをもらった。あの日から２年…。無我夢中で自分自身に挑戦し続け、駆け抜けてきた。取材や執筆、イベントの企画・運営といくつも取り組んできた。

府内五番街にある府内フォーク村「十三夜」は、私が初めて取材に行った場所だ。その後も数度にわたり、取材経験を重ねた。

経験しながら全てを学んでいった。あいさつやお礼の仕方、取材の方法、原稿の書き方…。先生に添削してもらい、「こんな書き方や表現があるんだな」と気づいた。

でも本当は、あのころ「十三夜」に取材に行くのが怖かった。毎回違うミュージシャン。何も分からない小娘が、音楽に命をかけている人たちを取材し、原稿を書く。「私でいいのか」と何度思ったことか。私なりに体当たりでぶつかっていた気がする。

そんな時、あるミュージシャンに言われた言葉を思い出す。「君が感じたままに書いてくれればいいんだよ。だから、最後まで聞いてね」。その言葉と表情は忘れない。あの日、私は取材する意味を再認識した。

２年間の時は過ぎ、私の短大生活がこの一冊の冊子に詰まっている。いろいろあったなぁ。微笑みが出る。「いつも発見や興味を持ってないと、生きてる意味ないよ」。先生が言った言葉。今ならその言葉の意味、なんだかわかる気がする。

私は今春、臼杵ケーブルネットに就職し、制作スタッフとして働く。情報伝達のマルチな世界へ飛び込むのだ。焦りはない。私には２年間で得た貴重な経験があるからだ。（森本絵美莉）

◇努力はウソをつかない

「君は編集者には向いてない」。下川教授の言葉が突き刺さる。雑誌の編集者を夢見て短大に入った。しかし「キャンパスカフェ」や「新聞雑誌制作演習」などで、取材・執筆を重ねる中、実は、自分でもそのことに薄々気づいていた。

昨年１月、教授から「Ｖｏｉｃｅ第２号」の編集長を任された。編集者になる夢をあきらめたが、こうした仕事を任されるだけの信頼と技量はある。そう思えるのがうれしかった。「地域活動フォーラム」の特集号だった。多くの学生に執筆を頼み、グラフィック担当の小坂さんと共に毎日広告の赤城さんのもとに、何度も足を運んだ。

外部の方と学生だけで話し合いをするのはとても緊張した。この経験は普通の学生には絶対にできないものだ。制作期間は１カ月半。その間、下川教授に怒られ、赤城さんにも迷惑をかけた。

自分自身のふがいなさに悔し涙が出ることもあった。それでも多くの人に支えてもらいながら、「Ｖｏｉｃｅ」を作り上げることができた。この作品は私にとって、かけがえのない宝物となった。

卒業研究で再び「Ｖｏｉｃｅ」編集長の一人になった。この冊子は私たちが２年間で学んだことの集大成だ。成長した私たちの姿を見てほしい。

昨年１２月末、私は念願の内定を頂いた。今春からはホテルニューツルタの営業として働くことになる。１年間続いた就職活動は、確実に私の成長へと繋がった。様々な企業と出会うことで見聞を深め、自分自身を高めることができた。

苦しい時に母から送られてきたメール。「その努力はきっと報われる」。自分を信じて活動してきた結果だった。この気持ちを忘れずに新しい未来へ突き進みたい。（中村早希）

◇「キラキラ光る」私になった

「疾風怒涛」。私のキャンパスライフは、この言葉がピタリと当てはまる。いい思い出も悪い思い出もあるが、どれも私の財産だ。

「雑誌編集者」になるのが夢だった。芸短を選んだのは、実践的な活動ができる環境があったからだ。それが「キャンパスカフェ」だった。初めて取材したのは、音楽科の66歳の同級生だった。

「生き生きしている」。自分の祖父母と同じ位の年齢の人が、楽しそうに音楽のことを話す姿がうらやましかった。「私も何か目を輝かせて語れるものを作りたい」。その気持ちが、今の私につながった。

全ての土台になったのが「日韓次世代交流映画祭」だ。１年生ながら「学生管理」の責任者になった。ゲストのスケジュール管理から学生スタッフへの指示出しまで、さまざまな仕事をこなした。夜中３時まで作業をして、朝８時に登校するという日もあった。

その分、やり遂げた時の達成感は大きかった。お客様にも「ありがとう」と言ってもらえた。素直にうれしかった。目をキラキラさせて語れるものができた。

そしてもう一つが、この「Ｖｏｉｃｅ特別号」だ。念願の編集者デビュー作である。ここに至るまでたくさんの壁にぶつかり、なんとか這い上がってきた。

「キミみたいな子は珍しいよ」。何かあるたびに下川教授は口にする。褒め言葉だ。マルチにこなせる力を２年間で養った。そして、謙虚であることの大切さを学んだ。

私は今春から、株式会社「えがお」の社員となる。健康食品の通信販売が主体だ。「雑誌編集者」には程遠い。しかし、これは昨年11月に亡くなった父が招いてくれた“縁”だと思う。広報担当が目標だ。一人でも多くの人を健康で幸せにしたい。謙虚に素直に、そして笑顔で生きていこう。（赤池すずか）

Voice
ヴォイス
大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞
〒870-0833　大分市上野丘東1番11号　大分県立芸術文化短期大学
tel.097-545-0542（代表）／fax.097-545-0543
編集／赤池すずか、中村早希、森本絵美莉　2011年2月発行

平成 22 年度　サービスラーニング活動内容

〈 前 期 〉

■あしなが学生募金　■アースデイ　■上野の森の会　■園芸サークル　■おおいた親子劇場
■大分たなばた祭　■キャンドルナイト　■キャンパスカフェ　■竹田食育ツーリズム
■鶴崎 SAEMON23　■福祉施設ボランティア　■府内学生 ECO フェスタ　■湯布院映画祭

〈 後 期 〉

■あしなが学生募金　■あしながＰウォーク 10　■上野の森アートフェスティバル
■上野の森の会　■園芸サークル　■キャンドルナイト　■キャンパスカフェ
■日韓短編映画祭　■スタジアムクリーン研究会　■国際車イスマラソン
■芸短竹田交流活動